

目的 「生活慣習」研究の一環として、一生を通して大部分の人が経験すると思われる一方から他方への通過の様相について、その文化的意義について考える。

方法 大分県でも西南の内陸部に属している日田郡津江地方（前津江、中津江、上津江）を対象地とし、事例を収集し、坪井洋文の用いる四段階説に従って整理した。

結果 日常生活の忙しさにもかかわらず、時代に応じて合理化（簡略化、省略化など）へ向かいながらも、通過儀礼に対する非日常的なあらたまった行為は、生活全体にうるおいを与える重要な役割がある。この地域の通婚圏は、日田市、高瀬、大山町に広がるが、大部分は村内婚で、イトコ結婚が一般的に多くかった。のちに村外婚（嫁入り婚）の普及によって、妻向い婚の形式がくずれた。出産、結婚式、葬式および年中行事のやり方の中に共通点が見られた。1) 後産と湯棺の水の捨てる場所と穢れ感、2) 野辺送り時の棺と花嫁は後ずさりして出る、3) 嫁迎えと精霊迎え、4) ヒアキの赤ん坊と結婚式の際の荷受取りの人夫のオシロイ、紅などの化粧についてなど。祝言の日は、雨が降ると「降り込み」と言って喜ぶが、嫁迎えの際の「婿逃げ」の風習では、花婿が水をかけられる。これは子宝にも鬼まれ安定した結婚生活を期待してである。結婚に親が反対する場合、「嫁盗み」あるいは「略奪結婚」といい、祝言もなく村外へ強引に嫁を連れて逃げる風習もあった。山村であるだけに山の神（山入禁）が年3回もある。8月15日の「精霊送り」には、仏壇には根ごとついた里芋を供えるが、精霊様は芋を葉に包み根でしばって、茎をかっいで持って行くという伝説もみられた。